65

逆子の灸
――至陰と張文仲――

奥野　繁生
さいたま市

現在，逆子に対して足の小指にある至陰穴へ灸することが広く行われているが，この灸法は『太平聖恵方』（982～992）巻百の「張文仲救婦人横産，先手出諸般符薬不捷，灸婦人右脚小指尖頭，三壮炷如小麦大，下火立産.」という記載が初出である．難産に対する宋以前の鍼灸方をみると，崑崙（甲乙・千金），肩井（千金），足太陰・太衝・足太陽・三陰交（千金翼）など，肩井を除けばみな足の穴を取っている．足への刺灸が難産に有効であるという認識は古くからあったようである．

しかし『外台秘要方』巻三十三には「小品療横産及側或手足先出方」として「可持麤鍼刺児手足．入二分許．児得痛，驚轉即縮，自当廻順．文仲・備急・千金・崔氏・集験，同.」とある．これによれば，『外台秘要方』に引く「張文仲方」では胎児の脱出した手足に直接鍼をして痛覚刺激を与え，回転を促していたことになる．これとほぼ同じ文章は『千金方』巻二にもみえ，また明代，万密齋『万氏女科』（1549）が「切不可使鍼刺足心及鹽涂之法．児痛上奔母命難存.」（巻之三・救逆産）と注意を促しているように，このような方法は当時広く行われていたようである．

そもそも『太平聖恵方』所載の張文仲灸法は4種あり，これらを『外台秘要方』にみられる「張文仲方」と対照してみると，同種のものは見当たらず，むしろそのうちの一つは『千金方』『千金翼方』，また『医心方』に引く「葛氏方」などに同類の灸法を見出せた．また『太平聖恵方』巻百には，張文仲以外にも，岐伯・黄帝・秦丞祖・華陀の名が付された灸法が全部で8種ある．これらについても同様に検討すると，すべて『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『肘後備急方』『医心方』などに同類の灸法を見出せたが，これらの灸法に付される固有名について一致するものはひとつもなかった．

以上の検討から，『太平聖恵方』巻百に記載される灸法はそれ以前の鍼灸方をベースにしているものがほとんどだが，それと確認できないものもあった．確認できないものは張文仲灸法3種であり，これには横産灸法も含まれる．これらが「張文仲方」の佚文である可能性を否定することはできないが，積極的にそうと認める根拠もまた見出しがたい．これまでの検討により，『太平聖恵方』巻百所載の灸法に付される固有名については，慎重な態度をとらざるを得ないからである．

則天武后の侍御医を務めた名医・張文仲の名が冠せられたこの横産灸法はその後，『鍼灸資生経』『医説』『備急灸法』『婦人大全良方』などに広く引用されてゆくが，これを至陰穴と同定したのは中国では『類経図翼』（1624）が最初であり，その七巻・足太陽経穴の至陰の項にこの灸法が付加された．また十一巻・諸證灸法要穴・産難横生に合谷・三陰交と記した後，「一治横逆難産，危在傾刻，符薬不霊者，急于本婦右脚小指尖，灸三壮炷如小麦，下火立産如神，蓋此即至陰穴也.」と明記されている．そして清朝の『医宗金鑑』（1742）にいたって「横逆難産灸奇穴　婦人右脚小指尖　炷如小麦灸三壮　下火立産效通仙」という「灸難産穴歌」が作られ，これに『類経図翼』と同様，「即至陰穴也」との注釈が付されることにより，至陰穴といえば横逆難産という図式が確立された．『類経図翼』において十を越えていた至陰の主治が，『医宗金鑑』では難産以外，すべて略されたからである．

一方，日本では曲直瀬道三『啓迪集』（1574）に『医学正伝』（1515）を引いて「灸法．治難産及胞衣不下，灸至陰二穴，三壮．又灸大衝二穴，灸三壮.」（巻之七・胎前篇）とあるが，『医学正伝』の当該部分をみると，「灸法．治難産及胞衣不下，急于産母右脚小指尖頭上，灸三壮，炷如小麦大，立産.」（巻之七・臨産須知）となっている．つまり『啓迪集』における「至陰二穴」とは，「産母右脚小指尖頭上」に対応するものであり，これは『類経図翼』に先行する．したがって「右脚小指尖頭」を至陰穴と同定したのは，『啓迪集』を嚆矢とするといってよいであろう．